

使徒の働き 9 : 32-10 : 48

「異邦人が正式に教会に迎え入れられる」

9:32 さて、ペテロはあらゆる所を巡回したが、ルダに住む聖徒たちのところへも下って行った。

9:33 彼はそこで、八年の間も床に着いているアイネヤという人に出会った。彼は中風であった。

9:34 ペテロは彼にこう言った。「アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。」すると彼はただちに立ち上がった。

9:35 ルダとサロンに住む人々はみな、アイネヤを見て、主に立ち返った。

9:36 ヨッパにタビタ(ギリシヤ語に訳せば、ドルカス)という女の弟子がいた。この女は、多くの良いわざと施しをしていた。

9:37 ところが、そのころ彼女は病気になって死に、人々はその遺体を洗って、屋上の間に置いた。

9:38 ルダはヨッパに近かったので、弟子たちは、ペテロがそこにいると聞いて、人をふたり彼のところへ送って、「すぐに来てください」と頼んだ。

9:39 そこでペテロは立って、いっしょに出かけた。ペテロが到着すると、彼らは屋上の間に案内した。やもめたちはみな泣きながら、彼のそばに来て、ドルカスがいっしょにいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであった。

9:40 ペテロはみなのを外に出し、ひざまずいて祈った。そしてその遺体のほうを向いて、「タビタ。起きなさい」と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった。

9:41 そこで、ペテロは手を貸して彼女を立たせた。そして聖徒たちとやもめたちとを呼んで、生きている彼女を見せた。

9:42 このことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた。

9:43 そして、ペテロはしばらくの間、ヨッパで、皮なめしのシモンという人の家に泊まっていた。

10:1 さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリヤ隊という部隊の百人隊長であった。

10:2 彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが、

10:3 ある日の午後三時ごろ、幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。御使いは彼のところに来て、「コルネリオ」と呼んだ。

10:4 彼は、御使いを見つめていると、恐ろしくなって、「主よ。何でしょうか」と答えた。すると御使いはこう言った。「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って、覚えられています。

10:5 さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。

10:6 この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっていますが、その家は海べにあります。」

10:7 御使いが彼にこう語って立ち去ると、コルネリオはそのしもべたちの中の一ふたりと、側近の部下の中の敬虔な兵士ひとりと呼び寄せ、

10:8 全部のことを説明してから、彼らをヨッパへ遣わした。

10:9 その翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈りをするために屋上に上った。昼の十二時ごろであった。

10:10 すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとりとして夢ごちになった。

10:11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。

10:12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。

10:13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。

10:14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」

10:15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」

10:16 こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。

10:17 ペテロが、いま見た幻はいったいどういうことだろう、と思い惑っていると、ちょうどそのとき、コルネリオから遣わされた人たちが、シモンの家をたずね当てる、その門口に立っていた。

10:18 そして、声をかけて、ペテロと呼ばれるシモンという人がここに泊まっているだろうかと尋ねていた。

10:19 ペテロが幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。

10:20 さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」

10:21 そこでペテロは、その人たちのところへ降りて行って、こう言った。「あなたがたのたずねているペテロは、私です。どんなご用でおいでになったのですか。」

10:22 すると彼らはこう言った。「百人隊長コルネリオという正しい人で、神を恐れかしこみ、ユダヤの全国民に評判の良い人が、あなたを自分の家にお招きして、あなたからお話を聞くように、聖なる御使いによって示されました。」

10:23 それで、ペテロは、彼らの中に入れて泊ませた。明るる日、ペテロは、立って彼らといっしょに出かけた。ヨッパの兄弟たちも数人同行した。

10:24 その翌日、彼らはカイザリヤに着いた。コルネリオは、親族や親しい友人たちを呼び集め、彼らを待っていた。

10:25 ペテロが着くと、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝んだ。

10:26 するとペテロは彼を起こして、「お立ちなさい。私もひとりの人間です」と言った。

10:27 それから、コルネリオとことばをかわしながら家に入り、多くの人が集まっているのを見て、

10:28 彼らにこう言った。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました。」

10:29 それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに来たのです。そこで、お尋ねしますが、あなたがたは、いったいどういうわけで私をお招きになったのですか。」

10:30 するとコルネリオがこう言った。「四日前のこの時刻に、私が家で午後三時の祈りをしていますと、どうでしょう、輝いた衣を着た人が、私の前に立って、

10:31 こう言いました。『コルネリオ。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられている。』

10:32 それで、ヨッパに人をやってシモンを招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれている。この人は海べにある、皮なめしのシモンの家に泊まっている。』

10:33 それで、私はすぐあなたのところへ人を送ったのですが、よくおいでくださいました。いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出しております。」

10:34 そこでペテロは、口を開いてこう言った。「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、

10:35 どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。

10:36 神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。

10:37 あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始まって、ユダヤ全土に起こった事がらを、よくご存じです。

10:38 それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。

10:39 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行われたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。

10:40 しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。

10:41 しかし、それはすべての人々にではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちにです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられて後、ごいっしょに食事をしました。

10:42 イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。

10:43 イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられる、とあかししています。」

10:44 ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。

10:45 割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。

10:46 彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言った。

10:47 「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができませんか。」

10:48 そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた。彼らは、ペテロに数日間滞在するように願った。

はじめに

10 章が今日の学びの中心ですが、その個所の学びに入る前に、9 章 32-43 節の出来事を理解する必要があります。

新約聖書の原本は、章や節といった区切りはありませんから、私たちの学びも必ず章ごとに分けられるわけではありません。

重要な出来事の前に何が記されているか踏まえておく必要があります。

これまでは、神の新しい契約の確立について、使徒 2 章で学びました。そこでは、神は五旬節にエルサレムにいたユダヤ人におもにかかわられ、神の教会が生まれました。

古い契約が、神の新しい契約によって取って代わられたのです。

この新しい契約は、神の御子イエス・キリストの血によって結ばれました。

次に 8 章で、神の恵みはサマリヤ人にも差し伸べられ、ユダヤ人がエルサレムで体験したのと同じようにサマリヤ人も聖霊に満たされました。

ここから、神の働きの第三段階に入ります。神のご計画のうちに、神の教会に異邦人を正式に含めるというものです。

異邦人もユダヤ人の信仰に入れるようになったことを、ユダヤ人が理解する必要がありました。

これについては過去にイザヤ書などで預言されていましたが、ユダヤ人の信徒が神の新たな契約に異邦人を容易く受け入れることはありません。

ですから、五旬節で神に用いられたペテロ自身がそのことを心から納得する必要がありました。また、異邦人を新しい契約の仲間として受け入れる場所となるヨッパで、ペテロが尊敬を得ていることも重要でした。

この個所には、ペテロが各地を巡り、ルダに住む信徒たちを訪ねたとあります。

ペテロはそこで、中風で 8 年も寝たきりだったアイネヤという男性に出会います。

34 節でペテロは、「アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。」とアイネヤに言いました。

すると奇跡が起こり、アイネヤは完全に癒されました。

この出来事で、ルダの住民が皆、主に立ち返りました。その町の当時の人口はわかりませんが、1946 年にはそこに 1,500 人のクリスチャンがいたことがわかっています。

これが、10 章の出来事の背景です。

10 章には、私たちが学ぶべき 4 つの状況があります。

コルネリオが御使いを見たこと。(1-8 節)

ペテロの見た幻。(9-16 節)

ペテロとコルネリオの出会い。(17-33 節)

そして、救いを伝える福音が世界中のすべての民のためのものだというペテロの発言と、聖霊がこの発言を確証づけられたことです。(34-48 節)

1. コルネリオが御使いを見る。(1-8 節)

1-2 節に、コルネリオについての紹介があります。

まず、彼は神を畏れかしこむ異邦人でした。つまり、ユダヤ人の神を信じていたので尊敬はされていたけれども、割礼は受けていなかったため、汚れた異邦人だったという意味です。

そして彼は、貧しい人々に気前よく施す人でした。

さらに、彼は祈りの人でした。自分が何か欲しいから祈るだけではなく、ユダヤ人の神とのつながりを求めて祈っていました。

2 節には、「いつも神に祈りをしていた」とあります。

彼は部隊の百人隊長でした。つまり、100 人の兵士の監督官でした。

彼が率いる隊は、イタリア出身の人々で構成されていたので、「イタリア隊」と呼ばれていました。

午後 3 時ごろ、コルネリオは幻で御使いを見ました。
その御使いは、彼の名を呼んで直接語りかけました。
最初に御使いが口にしたのは、コルネリオの祈りや惜しめない施しに対する褒め言葉です。
それから 5 節で、ヨッパに人を遣わして、ペテロとも呼ばれているシモンを招くようにとコルネリオに命じます。
御使いは、海辺にある皮なめしのシモンという人の家にシモン・ペテロがいると居場所を教えめました。
そして、この状況をシモン・ペテロは承知していると言って、信仰によってそうするようにと告げました。
コルネリオは御使いの言葉に忠実に従いました。何も疑問を持たずに、すぐに兵士ひとりとしもべふたりに、シモン・ペテロを迎えに行かせました。

適用

先に話を進める前に、ここでふたつの適用ポイントをお話しておきましょう。

1. コルネリオは、御使いに命じられたことにすぐさま従いました。

クリスチャンなら、毎日聖書を読んでいるはずですが、そして、毎日祈っているはずですが、御使いを見なくても、神のみことばである聖書をとおして神から語りかけられます。

神の御声を聞いたなら、それに基づいて行動しなくてはなりません。後回しにしてはいけません。

神には神のタイミングがおありです。神に用いられるためには、即座に動く必要があります。もちろん、人生を左右するような大きな決断をする前には慎重に調べて考えるのが良いですが、時には、即座に動くことで他の人にも自分にも祝福となります。

2. 天の神は、私たちの祈りの生活やお金のささげ方をご覧になります。

そう思うと、日頃から真剣に祈ろうと思うのではないのでしょうか。また、OIC に十分の一献金を確実にささげるだけでなく、必要に応じてさらにささげようと思うでしょう。

OIC では時折、「特別献金」も募ります。

以前は毎月募っていましたが、特別献金を募る週には十分の一をささげずに特別献金にささげる人がたくさんいました。

これは立派な行為かもしれませんが、正しくありません。

このような特別献金は、什一献金とは別にささげるものです。

つまり、犠牲的なささげものです。

たとえば、日曜の礼拝後にレストランで食事をする代わりにお弁当を持ってくれば、特別献金に 1,000 円ささげられます。

皆がそうすれば、OIC の通常献金から必要な経費を支払っても、特別献金に 8 万円集まることとなります。

次回、特別献金を募る時は、皆でそうしてみても良いでしょう。

日々の祈りについては、朝起きて布団から出る前に一番に祈りましょう。もし昼休みに祈れるならそれもよいでしょう。ダニエルは一日 3 回祈っていましたが、自制をもってとても良い習慣をつけていました。

長時間祈る必要はありません。短時間でも、イエスに向かって語りかけ、イエスの声に耳を傾ける時間を一日 3-4 回取るなら、祈りが豊かにされることを体験できるでしょう。

私が通ったバイブルカレッジでは、学長が、「進みながら祈り、祈りながら進め」とよく言っておられました。

つまり、何をするにもイエスとともにしなさいということです。

箴言 3 : 5-6

3:5 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

3:6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

2. ペテロの見た幻。(9-16 節)

9 節には、ペテロが正午に祈るために屋上に上がったとあります。静まれる場所がそこだけだったのかもしれませんが、昼食の時間が近づいて、ペテロはお腹が空きました。それで、食事の用意をしてもらいました。食事が用意されている間に、ペテロは夢見心地になりました。そして、幻のようなものを見ました。彼が見たのは、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるさされて地上に降りて来る様子でした。その布の中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥がいました。そして、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえました。ペテロは、旧約聖書の律法で食べることを禁じられているものは食べたことがない、これまでずっとユダヤの律法を守ってきた、と言ってそこにいる生き物を食べるのを拒否しました。レビ記 11 章に、食べ物に関する律法が記されています。するとその声が再び聞こえ、「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と言いました。同じことが 3 度繰り返され、その布は天に引き上げられました。聖書で何かが 3 度繰り返されるのは、それがとても重要だからです。ペテロは、何かとても大切なことが起こっていることに気づきました。神が何か大切なことを教えようとなさっていたのです。

3. ペテロとコルネリオの出会い。(17-33 節)

ペテロが屋上で見た幻について戸惑っていると、玄関の戸をたたく人がありました。そして、ペテロは呼ばれて、コルネリオの遣わした人たちに会いました。このことが起こる直前に、聖霊がペテロに語られました。聖霊は言われました。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」ペテロは、この人たちを送られたのは神であるという確信をもって、階下に降りました。そして、当然ながら、彼らに訪問の意図を尋ねました。彼らは、コルネリオがどういう人かを説明し、ペテロの教えを聞くために家に招くよう御使いがコルネリオに命じたと説明しました。3 人は皮なめしのシモンの家に招き入れられ、一泊しました。翌日、ペテロはヨッパの信徒を連れて、カイザリヤに向かいました。コルネリオは、親せきや親しい友人にもペテロの話聞いてもらおうと家に招き、ペテロの到着を待ち構えていました。ペテロが来ると、コルネリオはペテロの前にひれ伏して拝みました。ペテロは、自分はただの人間だと言って、コルネリオに拝まれるのを断りました。多くの人たちの見ている前で、ユダヤ人として異邦人と仲良くしたり、外国人の家を訪れたりするのは律法にかなわないことだと説明しました。けれども幻で、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないと神に言われたと言いました。そして、自分がコルネリオの家に呼ばれた理由を尋ねました。これに答えて、コルネリオは 4 日前に午後 3 時まで祈っていると御使いが現れたと説明しました。御使いは、「輝いた衣を着た人」と表現されています。コルネリオは、御使いの語った内容を告げました。その内容とは、ペテロを家に招くなら、すべてを説明してくれるだろうというものでした。こう説明してから、私たちは皆、あなたをとおして語られる神のお告げを聞こうと待っていると仰いました。ペテロには説教を準備する時間はありませんでしたが、このふたつの幻について考え、ふたりの出会いに込められた神の目的について思いめぐらしました。

4. ペテロがコルネリオの家族に福音を伝え、聖霊が異邦人に下る。(34-48 節)

これは、ユダヤ人が異邦人に福音を伝えた最初の説教ですから、その要点にしっかり注目する必要があります。

1. 神の救いは、世界中のすべての人のものです。(34-35 節)

ユダヤ人は今も神の選民ですが、新しい契約における救いは、神を恐れ、正しいことをするすべての人に差し伸べられます。

2. 神の救いは、イエス・キリストによってのみ与えられます。イエスの生き方や、どうしてお方であるか、そしてイエスの死が成し遂げたものは何かを理解し、イエスの復活を信じる必要があります。

今日私たちが理解しなくてはならない基本事実は、神は唯一おひとりだということです。この神は、聖書に説明されたとおりのお方で、この世界と世界中のすべてをお造りになりました。

最初の男を造り、男の助け手として最初の女を造られました。

神は彼らにたったひとつの掟を与えられましたが、最初の男と女はその唯一の神の掟に背きました。

その背きの罰が死です。

この呪いは、すべての人類に及びました。

しかし、神はご自身のお造りになった人間を愛されたので、神と人が関係修復できる道を備えてくださいました。

最初は、動物の死によるものでした。傷のない子羊をささげるのです。

罪を犯して神の律法を破った人間の代わりに、動物が死にます。

けれどもこれは、神の御子イエス・キリストが送られるまでの一時的な措置でした。イエスは、この世の罪のために一度だけささげられる永遠のささげものとなられたのです。

こういうわけで、すべての人にとって、聖書の神を信じ、イエスによる救いを信じるのが、救いの唯一の道なのです。

3. 神の救いは、旧約聖書の預言者によってあらかじめ語られ、確認されていました。

これは非常に重要なポイントです。西洋のクリスチャンの多くは、旧約聖書に触れずに福音を語ります。

けれども、全体像を知るには、話を最初から始める必要があります。

本を最後のほうだけ読んだなら、話がわからなくなります。同じように、キリスト教も全部を話さないと間違った印象を与えてしまいます。

4. ペテロは、イエスの生と死と復活の証人として個人的な証を語りました。

これも大切なポイントです。ペテロは、イエスの人生と死と復活を直接見たので、語ることができました。

私たちも、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書から教えると、イエスを証できます。

また、イエスに喜んでいただけるように生きる私たちの生き方も、証となれます。

5. 最後に、イエスを信じ、イエスについてペテロが語ったことを信じるなら、罪を赦されると、ペテロが異邦人に語ります。

ペテロは、イエスによって異邦人の罪も赦されることを強く確信していました。皮なめしのシモンの家の屋上で神が彼に語りかけ、心を整えてくださったからです。

44 節には、ペテロの話聞いていた人たちすべてに聖霊が下ったとあります。

信じた人は、使徒 2 章の五旬節の話でユダヤ人が体験したのと同じ体験をしました。

彼らは、神を賛美しながら、異言を話しました。

神がこの時も力をもって聖霊を注がれたのは、神の教会の確立の 3 つの段階をすべて結びつけるためです。

3 つの場面で違った時に聖霊が下られた状況をよく見てみましょう。

使徒 2 章では、みことばが語られる前に聖霊が下られました。使徒 8 章では、みことばが語られた後に聖霊が下られました。そして、ここの使徒 10 章では、みことばが語られている最中に聖霊が下られました。

聖霊の働き方について人間が体系化しないように、神はそうなさったのでしょうか。

この体験を経て、ペテロは罪の赦しを受けた異邦人にバプテスマを受けるよう勧めました。

クリスチャンになっているのに、洗礼を受けていない人はいますか。

使徒の働きでバプテスマが登場するのは、常に信じた直後です。

信じているのに洗礼を受けていないなら、その時が来ているのではありませんか。

福音を理解してイエスを心から信じたなら、すぐに受けられます。

ペテロと同行者は、それから数日間滞在するように招かれました。
その期間、きっとたくさんのことを教えたことでしょう。

適用

1. 神は、すべての人を救う心をお持ちです。

私たちは日本で暮らし、日本で働いています。ですから、偏見を乗り越えて、日本人に手を差し伸べることを神は求めておられます。国内よりも海外で多くの日本人がクリスチャンになるのは、よく知れた話です。

その理由のひとつは、日本人が欧米に行くと、キリスト教について興味を持って知ろうとしたり信じたりする自由を感じるからです。

日本の文化の枠内では、イエスに自らの人生をまったく明け渡す自由が個人に与えられていないように感じます。

そこには同調圧力が常に働いています。これには理由があります。私自身、昨年の12月に知りました。

日本ミッションの宣教師をかつて教えていたエスター・マックストン博士の講義に参加したときのことです。

その中で博士は次のように説明していました。

a) 1890年、日本の新憲法が制定され、信教の自由が保障されるようになりました。

しかし、政府は神道をうまくふたつに分けました。

「国家神道」と「民間の神道」です。

b) 「国家神道」は非宗教扱いされました。当時、天皇は日本の神とされていました。そして、国家神道は日本の伝統文化とされました。全国民が神道の神社で拝むべきとされたのです。この方針は、学校で毎日教えられました。ふたつの要点は、天皇を崇拝することと、神社に参拝することです。

これは、日本人がクリスチャンになっても、神社に参拝できる状況を作りました。神道の神社は宗教ではなく、日本人としての伝統だと主張したからです。

これを融合宗教と呼びます。ふたつの宗教を混合し、どちらにも完全に献身することなく、両方信じるのを可能にすることです。

c) 政府は、「民間の神道」が宗派に分かれることを許可し、当時、8つの宗派に分かれました。これらの宗派に属すると、宗教とみなされます。

d) 書類上の区別はされましたが、日本人の思想は変わりませんでした。

変わらなかったのには、ふたつの独特な神道の教理が関係しています。

ひとつめは、日本は八百万の神の国というものです。

ふたつめは、日本人は神の子孫というものです。

ですから、日本人は昔から、自分たちが特別な血統だと考えているのです。

さてここから、ユダヤ民族と日本人の関係についてです。

神は、御民となる民族を作り出すために、アブラハムを選ばれました。それが、ユダヤ民族です。旧約聖書はおもに彼らの歴史です。

五旬節に教会が始まった時、そこにいたのはおもにユダヤ人でした。そして、そのユダヤ人たちはイエス・キリストとその死と復活に関する福音を信じましたが、それはユダヤ人のものだと考えていました。新しい契約とは言え、ユダヤ人との新しい契約だと考えたのです。それでペテロも、神の新しい契約に容易く異邦人を迎え入れられませんでした。乗り越えなくてはならない課題だったのです。

さて、日本人にも乗り越えなくてはならない問題があります。

八百万の神と言われ、たくさん神がいて思っていたのに、キリスト教に出会うと、神はひとりしかいない、聖書の神だけだ、と突然言われます。

また、自分たちが神々から生まれた特別な人間ではないという事実も受け入れなくてはなりません。

さらに、日本文化は神道中心に動いています。神道が日本人に深く根ざしているのです。多くの日本人にとって、クリスチャンになるとは日本人であることをやめるということなのです。けれども、どの国の人でも、日本人も、クリスチャンになれば、神が新たなアイデンティティを与えてくださいます。

そのアイデンティティとは、イエス・キリストにある自分です。
イエスを信じる前の自分を乗り越えて、新しいアイデンティティを喜んで受け入れることが、すべてのクリスチャンにとって大切です。
これは大切なテーマですが、今これについて話す時間は十分ないので、イエス・キリストにあるアイデンティティについて、次回のメッセージで触れたいと思います。
次回、使徒 11 章ではおもに、ユダヤ人の教会に神が異邦人を迎え入れられたと信じているとペテロが語ります。

第二次世界大戦の終戦時に、天皇は神ではないと宣言させられました。この時、すべてのキリスト教会は統一されました。

今私がお伝えしたい要点は、もしあなたが日本人でクリスチャンになったら、年に一度であっても、親族との付き合いであっても、神社参拝についての考え方を乗り越える必要があります。

国家神道も宗教であることを、すべての日本人が理解しなくてはなりません。

日本人であろうとどこの国の人であろうと、クリスチャンになれば、すべての宗教的な物事や心の偶像と決別しなくてはなりません。そして、私たちの人生のために神が備えられたみこころとご計画に完全に自らを明け渡さなくてはなりません。

日本にキリスト教の拡大を阻む最大の障壁は、神棚や仏壇を家から撤去したり神社参拝をやめたりするのを日本人クリスチャンがなかなかしないことだ、と有名な日本人伝道者から 30 年以上前に聞いたことがあります。

2. 私たちは、海外にいる日本人だけでなく、国内にいる日本人にも福音を伝えなくてはなりません。

明日のリトリートでは、素晴らしい証をふたつ聞きます。

日本人男性の証と北アイルランド人の証です。

ふたりとも、日本人に福音を伝えるよう神に召された人たちです。

近年 OIC からは、日本人男性が日本人宣教のために聖書学校で学ぶよう教会から派遣された例はないと思います。

けれども、神が日本人男性を私たちの交わりの中から起こしてくださるよう祈るべきです。フルタイムでイエスに仕え、日本にあったインターナショナルチャーチを開拓する日本人男性を祈り求めましょう。神が私たちの祈りに答えてくださいますように。